

# 親の恩～道元禅師の誕生日に

平成26年1月第4週放送

曹洞宗を開かれた道元どうげんぜんじ禅師は、正治二年、西暦では一二〇〇年という覚えやすい年の旧暦一月二日にお生まれになりました。現在の暦こよみに直した際に、一月二十六日と定められました。まさに今から八百十四年前の今日、道元どうげん禅師がお生まれになったのです。

道元禅師は、出家をされ、禅の教えを求めて宋そうの国、現在の中国に渡り、如浄にょじょう禅師と出逢い、修行を積み、禅の教えを受け継ぎました。

日本に帰国し、始めは京都にて活動をされた後のち、越前えちぜん、現在の福井県に大本山永平寺えいへいじを開かれ、さらに禅の修行を続け、弟子を育てられました。

そのようなご生涯を送られた道元どうげん禅師ですが、ご両親のことについては、史実しじつとして不明確な点も見られます。

現在は研究も進み、これまで父親とされていた源通親みなもとのみちちかの次男である通具みちともが父親であると推定され、母親のことは判らないようです。また、母親とは道元禅師八歳の時に死別をしていると伝えられ、父親が亡くなったのは二十八歳の時であったといわれています。

実際、道元禅師は、ご自身が五十三歳の年に、父親である道具みちともの二十七回忌にちなんだ説教をされています。

その中で、「父の恩を報ずるほう、乃ちすなわ、世尊せそんの勝躑しょうちよくなり」と説かれています。訳をすれば、「親の恩むくに報いることは、お釈迦さまのころからずっと、出家、在家にかかわらず、人々が続けてきた尊い行いである」となりましょう。

ひとたび出家をすれば、親子の縁を切って、厳しい修行をする……“出家”にはそんなイメージがあるかもしれませんが。いや、実際に禅の道場に入門し、世俗の縁と距離を保って修行生活を送るということも間違っていないでしょう。

しかしそれは、「もう親でもない、子でもない」という切ないものではないのです。

道元どうげん禅師はむしろ、世の中の多くの人たちを救いたいという誓願せいがんとともに、命をいただいてこの世に生まれ育てられたことに、少しでもご恩返しができるようにと願いながら修行生活を勤めることも、尊いことであると説かれているのです。

私たちが生まれたその日に、一組の夫婦が父親と母親になりました。私たちがスクスクと育っていったその影で、両親はさまざまな苦勞を重ねていったことでしょう。

自分の誕生日に限ることではありませんが、「今日のこの一日を、両親への恩返しのために捧げよう」と誓いを立てて過ごすのも、素晴らしいことなのではないでしょうか。

— 終 —